**研究発表要旨**

**『砂の城』の向こう側
― *The Sandcastle* (1957) 試論 ―**

**駒沢　礼子**

　高校教師Morは妻のNanとは歯車が噛み合わず家庭生活に疲れ果てていた折、若い画家Rainと出会い恋に陥りそこで自由や真実を掴んだかに思いきや、Nanの策略で現実に戻されるというのが本書の大筋である。この三角関係小説は、人間臭さを忘れかけた我々現代人に深いものを感じさせる。作品の分析後、その向こう側に見えるものを考察したい。

　**１．Rainの絵画論**　RainはMorの勤務校の前校長の肖像画を製作中である。彼女は思いのままに描き、Morとの愛も深めるが、ある事件をきっかけにMorとの別れを決意した時、真の描き方に目覚める。そしてBledyardの「己を謙虚にして対象物を見てありのままを描く」との言葉を再認識する。この創作態度は、漱石の『草枕』の画家に通じる。マードックと漱石には何の接点もないのに共通するところがあるのは興味深い。

　**２．Morの子育て論**　Morは息子Donaldに立派な人間への最善の道として大学進学を勧めていた。進学の意志のない彼は夜中にSt Bride’s校の尖塔に登り降りられなくなる事件を起こす。宙吊りになり落下寸前の彼を父が救出する。この事件は人間は切羽詰らねば次の次元へ脱出することができない瞬間の比喩表現である。この体験によりMorは、息子の本心を知ると同時に、我欲の強い自分の正体に気付かされ自我の変革をせざるを得なかったのであるから、子育ては結局自分育てでもあると言える。

　**３．不思議な存在**　１人目は樵かgipsyかと思われる男性である。MorがRainとの愛の世界に浸っている時この人物が現れ、２人を容赦なく現実に引き戻す役割を果たす。２人目はMorの娘Felicityである。霊感が強く巫女を自称する彼女が魔女になる儀式の最後にカード占いをし、父とRainの仲が壊れる予兆を発見する部分は７頁にも及ぶ。現実と非現実の間に存在する２人の不可思議な人物は伏線のおき手であり、人間が次の次元へ飛躍する時の理屈では説明できぬ力の具現化と解釈した。

　**４．砂の城の象徴性**　１つは<乾ききって崩れやすい>イメージとして、MorとRainが築こうとして築けなかった「愛の世界」である。もう１つは<砂に足を入れた時の包み込まれるような安心感>の象徴として、崩壊しそうであったが最後に順調な形になったMorとNanの「家庭」である。Nanは、Shakespeareの名言や策謀を借りて「夫は代議士立候補の志があり、今が汐時で自分は彼を支持したい」と演説し、Rainを退かせ、自分自身は夫に従順で好意的になる逆転劇を果たす。そして「家庭」とは己の帰り行き、自己存在確認をし自信を取り戻す場：いわば心の故郷との余韻を与えてこの小説は終る。

　自我の超越に憧れながら、執拗な自我の働きに溺れ試行錯誤する人間の弱さがMorの姿である。デジタル化時代に生きる我々だからこそ、彼の生き様のようなアナログ的部分を忘れてはならない。我々は生きる手段にのみ没頭し、目的を失ったまま走っているのではないか。現実に翻弄されると言う点では、我々もMorも同じであるが、彼には常に「自己を無にせよ」と諭すBledyardの存在がある。「無」とは、egoを捨て空っぽの心（empty mind）になれば何でも受け入れる自由な境地（free mind）が得られる無心、無我のことである。この「無」こそ人間が関心を向けるべき真の対象である「善」への唯一の道である。本書は、我々の生きる目的は「善」に目覚め、これを体得することこそ人として生きる力になると暗示しているのである。IMは「ごく普通の人も「善」を意図することがあり得る」と述べる。「善」の意義を持って受け止めれば人生は無意味ではないと確信する。「善」への憧れを人間力とすれば、この人間力の提示こそ本書の向こう側に見えるものである。